

令和元年5月8日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03273

研究課題名(和文) 和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study concerning the production and distribution of Wado-kaichin

研究代表者

松村 恵司 (MATSUMURA, Keiji)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・その他部局等・所長

研究者番号：20113433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：全国の和同開珎出土遺跡(784遺跡、出土総数6362点)の正確な分布図を古代の国単位に作成し、駅路、駅家、官衙関連遺跡、古代寺院などの位置関係から、和同開珎出土遺跡の性格を探った。その結果、出土遺跡が駅路沿いに分布する傾向が一層明確になり、畿外における銭貨流通が駅路沿いに展開した可能性が高まった。

また、法隆寺伝世木簡(東京国立博物館蔵)の分析により、銭貨発行以前には銀と布帛が価値尺度や交換手段として重要な役割を担っていたこと、7世紀後半における銀と布帛の価値関係が、その後の調庸の負担額や銭貨価値を規定し、律令的価値体系の基準となったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの初期貨幣史研究は、古泉学や社会経済史学を中心に進められてきたが、本研究は、出土銭貨が内包する遺跡情報に焦点をあて、出土銭貨から貨幣流通の実態解明に迫ろうとする考古学の新たな試みである。律令国家の貨幣政策により、物品貨幣から名目(法定)貨幣への転換がどのように図られ、名目貨幣である銭貨がどのように社会に受容されていったのかという貨幣の本質に迫る研究でもあり、現在の法定貨幣の社会的信認の形成史を探る上でも重要な研究である。

研究成果の概要(英文)： This research made an exact distribution map of Wado-Kaichin excavated from 784 sites in Japan, and verified the conventional understanding that the distribution range of ancient coins has been limited to the vicinity of the Capital and Kinai. As a result, it was found that there is a tendency which the distribution range had expanded along Ekiro (station).

In addition, through the analysis of wooden tablet of Horyuji Temple, it was revealed that silver and cloth played an important role as a measure of value and exchange means before the coin was issued. The value relationship between silver and cloth in the latter half of the seventh century stipulated the amount of tax burdens and the value of coins.

研究分野：考古学

キーワード：出土銭貨 考古学 貨幣史 経済史 和同開珎 貨幣経済

## 1. 研究開始当初の背景

1999年の飛鳥池遺跡における富本銭の発見を機に、わが国の初期貨幣史研究は新たな研究段階へと突入した。研究代表者はこれまでに飛鳥・藤原宮・平城宮といった律令国家中枢部の出土銭貨を対象に、古代貨幣史の再構築に向けた一連の研究を進めてきた。

その結果、我が国の初期貨幣が、新羅の一分銀とみられる無文銀銭（7世紀第3四半期を中心に流通）の貨幣的使用から、中国式鑄造貨幣に倣った富本銭の発行（683～708年）、銭貨の全国流通を目指した和同開珎の発行（708～760年）へと発展する歴史的過程を明らかにした。また、鑄造銅貨を基軸に据えた貨幣経済の導入が、唐の制度を模倣した律令国家体制の整備と深く関わり、富本銭や和同開珎の発行が藤原京や平城京などの中国式都城の建設と一体的に企図された事実を明らかにし、これらの研究成果は学界のみならず広く社会に認知されるようになった。

しかしながら律令国家が企図した貨幣流通の実態に関しては不明な点が多く、都城と畿内、及びその周辺でしか流通しなかったとする従来の通説の当否に関する実証的な研究が求められていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、平成18・19年度の科学研究費補助事業で集成した和同開珎出土遺跡（全国784遺跡、出土総数6362枚）の詳細な分析を通して、和同開珎の流通実態を考古学的に解明し、古代銭貨の流通圏に関する従来の通説的理解を検証し、国家が一方的に社会に投入した名目貨幣の地域における受容の実相と、流通実態の解明を研究の主目的とする。次に和同開珎の加工痕跡や鑄銭関係遺物の分析を中心に、文献史料との整合性を図りながら、和同開珎の量産を可能にした生産技術の革新と生産体制の解明を目指す。

## 3. 研究の方法

- (1) 旧国単位に駅路と郡境、駅家を入れた古代の国郡図のデジタルトレースを継続し、地図ソフトを使用して、和同開珎出土遺跡（784遺跡）の正確な分布図を作成する。
- (2) 奈良文化財研究所が公開する「古代地方官衙関係遺跡データベース」と「古代寺院遺跡データベース」を利用して、作成した国郡図に官衙関連遺跡と古代寺院跡の位置情報を盛り込み、古代の歴史的環境復元図を作成する。
- (3) 在地の有位者の存在を示す銅製帯金具の出土遺跡を(2)に重ね、古代の歴史的環境下で和同開珎出土遺跡の性格を考究するための基礎資料を整備する。
- (4) 畿内七道の広域図をデジタルトレースし、国単位に作成した和同開珎出土遺跡分布図を基に「和同開珎全国分布図」を作成する。
- (5) 和同開珎出土遺跡データベースの公開に向けて、データ入力と校正作業、図面の編集作業を進め、奈良文化財研究所のHP上での公開を図る。
- (6) 平成25年度に刊行した「日本古代貨幣関係史料集稿（一）」に続き、銭貨や市などの貨幣流通に関わる木簡資料の集成作業を進める。
- (7) 鑄銭司と銭貨生産に関する文献史料や論文を収集整理し、和同開珎の生産体制に関する基礎資料を整備する。
- (8) 和同開珎の出土分布を、律令国家の貨幣流通奨励策や運脚夫・役夫の帰郷対策と関連させて考察し、畿外における銭貨流通の実態に迫る。

## 4. 研究成果

- (1) 和同開珎の流通実態の解明については、計画通りに旧国単位に駅路と郡境、駅家を入れた古代の国郡図をデジタルトレースし、地図ソフトを使用して、和同開珎出土遺跡（784遺跡）の正確な分布図を完成させた。
- (2) 和同開珎出土遺跡と駅路との関係が最も明瞭な北陸道を対象に、若狭、越前、加賀、能

登、越中、越後 6 力国の 55 遺跡（出土総数 987 点）の分析作業を進めた。その結果、和同開珎出土遺跡が北陸道に沿って分布する傾向を把握できた。遺跡の種別は駅家推定地をはじめ官衙関連遺跡や荘園遺跡、祭祀遺跡、寺院跡、港津遺跡などで、一般集落遺跡からの出土はほとんど見られない。出土状況を見ると、自然流路や運河、溝から出土し袷に使用されたとみられる銭貨や、地鎮などの建築儀礼で埋納された銭貨が多数を占め、京畿内の出土状況と大差のないことが判明した。これらのことから、駅路沿いに銭貨を交換手段とする交易が展開した可能性が浮上した。

(3) その背景として、調庸運脚や役夫の帰郷時の飢弊を救済するために、彼らに軽便な銭貨を所持させ、旅の途次に随時食糧を購入できるシステムの整備を図ろうとした和銅初年の律令国家の銭貨政策と密接に関わる現象と考えられるようになった。このように和同開珎出土遺跡の分布から、畿外の銭貨流通が都と地方を結ぶ駅路沿いに展開した状況が明らかになったことの意義は大きい。

(4) 駅路沿いに銭貨を交換手段とする交易が展開したとする仮説を立証するために、奈良文化財研究所が公開する古代地方官衙関係遺跡データベースと、古代寺院遺跡データベースを利用して、国郡図に官衙関連遺跡と古代寺院跡の位置情報を盛り込み、和同開珎出土遺跡の分布図と比較検討する作業が必要になった。このため、前年度申請をおこない研究を再構築することにした。

(5) 今後は、有位者の存在を示す銅製帯金具の出土分布図を作成し、和同開珎出土遺跡と帯金具出土遺跡、官衙関連遺跡の関連を追究したいと考える。

(6) 和同開珎出土遺跡の分布図を東日本、西日本、畿内単位に作成し、七道諸国と畿内の分布傾向を明らかにした。その結果、畿内と都城を中心に、その周辺では駅路沿いに銭貨が分布する傾向がより明確になった。

(7) 畿外で最も和同開珎の出土量の多い近江国では、出土遺跡が必ずしも官道沿いに分布せず、畿内中枢部や都城周辺地域の分布状況に近似することから、広範な銭貨流通を推測できた。

(8) 法隆寺伝世木簡（東京国立博物館蔵）と、飛鳥池遺跡出土木簡を総合的に分析し、銭貨発行以前の社会において、物品貨幣である銀と布帛が価値尺度や交換手段として重要な役割を担っていたことを明らかにした。特に、天武 12 年（683）の銀銭使用禁止令を機に銀（無文銀銭）の計数単位が変化したことや、7 世紀後半の調布の賦課の規格の変化により、布帛の計数単位名が変化した可能性を把握できた。7 世紀後半における銀と布帛の価値関係が、その後の調庸の負担額や和同開珎の銭貨価値を規定し、律令の価値体系構築の基準となった可能性が高い。

(9) 長らく製作方法が不明であった無文銀銭の製作実験を行った。銀銭本体の製作方法に関しては、鑄造説と銀の延べ板截断説が対峙してきたが、実験の結果、鑄造の可能性が高まった。また、銀片の貼付法は、銀鑢付けではなく、いわゆる「オシャカ付け」と言われる無鑢鍛接法であることが明らかになった。

(10) 和同開珎出土遺跡（784 遺跡）のデータベースの設計、データ入力と付図の作成作業を進め、平成 28 年 3 月に奈良文化財研究所の HP 上での公開を実現した。

(11) 古代銭貨研究の基礎資料整備の一環として、黒川古文化研究所が所蔵する下間寅之助の『虎僊楼搦模帖』の複写版を出版し、滋賀県「沖の島出」と大阪「淀川堀」銭貨の性格について考察した。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

松村恵司「木簡にみる七世紀の貨幣単位について」『木簡研究』査読有、第 39 号、2017、151 - 164

松村恵司「貨幣誕生 - 飛鳥・藤原の銀銭と銅銭 - 」『飛鳥・藤原京を読み解く』奈良文化財研究所、2017、143 - 168

松村恵司「古代の銭づくり - 銭貨量産技術の復元 - 」『古代のテクノポリス鑄銭司・陶』査読無、予稿集、2017、19 - 27

松村恵司「恵美押勝の金・銀・銅貨」『法隆寺夏季大学』査読無、第 66 号、2016、47 - 64

松村恵司「飛鳥のものづくり」『飛鳥むかしむかし』朝日選書 950、2016、51 - 66

松村恵司「北陸道の和同開珎 畿外の銭貨流通をめぐって」『日本古代考古学論集』、同成社、査読無、2016、464 - 482

松村恵司「古代の銀と銀銭」『法隆寺夏季大学』査読無、第 65 号、2015、51 - 70

**【学会発表】** 計(4)件    うち招待講演 計(2)件

松村恵司「古代の銭貨生産技術」奈良文化財研究所第 121 回公開講演会、2017

松村恵司「古代の銭づくり」山口市教育委員会・山口大学『周防鑄銭司発掘 50 周年記念シンポジウム』2017

松村恵司「藤原仲麻呂と金・銀・銅貨」大和文化会『大和の歴史と文化』2016

松村恵司「押勝の金・銀・銅貨」奈良文化財研究所第 116 回公開講演会、2015

**【図書】** (計 1 件)

永井久美男・松村恵司『複写版虎僊楼搦模帖』科研費出版、2016、1 - 324

〔その他〕

「和同開珎出土遺跡データベース」

<http://mokuren.nabunken.go.jp/wadou/>